

島虎敏雄全集

しまねとしお ぜんしゅうだい
島尾敏雄全集 第Ⅰ巻

一九八一年五月二五日発行

著者 島尾敏雄

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二丁目二一

電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

振替東京六一六二二七九九

堀内印刷・美行製本

© 1981 Toshio Shimao

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

島
尾
敏
雄
全
集

第Ⅰ卷

晶文社

島尾敏雄全集第Ⅰ巻・目次

第一部 綴方・日記

ぼくは小学尋常科Ⅰ

13

ぼくは小学尋常科Ⅱ

24

ぼくは小学尋常科Ⅲ

60

第二部 小説・戯曲・小品

奇遇

87

剣山の想ひ出

98

村崎の場合

100

?

夕暮の哀愁

小品二篇

帰つて来た子供

育むもの

良心

或る少年の想像

魔性

廠舎生活

お紀枝

原つば

日曜学校

南山手町

天草の秋

母さん

暖い冬の夜に

噴水

浜辺路

266 264

第三部 旅行記

小豆島巡礼

浦上天主堂印象

九州の山

呂宋紀行

満洲日記

仏国寺行

426 411 325 299 294 289

第四部 詩篇

「LUNA」以前

キャンブ

433

思ひ出

T O R R O A D

春

夕方・キャンプ・星

月の光り

街燈・少女

朝

嵐

牛若の感傷

C I D E R

無題

気儘

習作詩人

病

「LUNA」詩篇

人生の賦

457 454 452 451 449 448 445 444 443 442 440 438 436 436 435

山嶺の気配

井戸ノ中ノ指導者

螢

頂点

虚勢

飛んでもない詩

詩三つ

かなしみひとつ

胸が重い

嫁いだ少女に

磐越西線の晩秋

出陣

想起来

出陣

月下の別れ

477 477 476

473 472 471 470

467 466 464 463 461 459

第五部 随筆・雑文

身辺記

「風の中の子供」から

伊丹万作について

カラマーゾフの兄弟を通して

見たるドストイェフスキイ

に関する断片

クレールに就てのノート

ドストイェフスキイの小説に

於ける冗長性について

「藤娘」を観て

断片一章

東北について

「友達」各位への私信

530 522 514 512 508

505 501

497 493 483

「こをろ」六号編輯後記

「こをろ」七号編輯後記

近況報告（十一月二十五日）

身辺記（二月十八日）

近況（四月十日）

福田三千也君のこと

友

矢山哲治の死

自家版『幼年記』あとがき

559 547 541 539 537 535 534 533 531

ブックデザイン
平野甲賀

第一部 綴方・日記

ぼくは小学尋常科 I

○綴方（大正十四年四月十九日）

ボクハケサ土イサンガクルツテ、ユイマシタカラ、弘明寺ニユキマシタ、ケレド、キマセンデシタカラ、ボクノオトウトト、ニンギヤウシバイヲミニイキマシタ。ソレカラウチヘカヘツテシコウヲシヨウトオモツテ、ヅグワバンヲダシテキルト佐藤サンガアソビニキマシタ。ソレカラ佐藤サント山アソビニデカケマシタ。ソシテサンザンアソンデウチニカヘリマシタ。ソレカラシコウヲシヨウトオモヒマシタガモウネムタクナリマシタカラヨシテネマシタ。

○五月一日のえんそくの日

僕のいもうとがえんそくの朝ひねくれて、なかなかこないの僕はさきにきてしまひました。そして田辺さんのうちにいつて一しよにいつてのつて見たら僕のいもうともこの電車にのつてゐました。そして僕のいもうとだけはちがふ道をいきましたから僕は田辺さんのほうをいきましたら田辺さんの

をおさんが僕にきやらめるをくれました。それから学校にきていよ／＼でだしました。それからさくらぎ町やいろ／＼なところをいろ／＼とみてゆきました。それからいよ／＼おへまつ小学校まできました。それからおへまつの学生がいすをしはらはへもつてきてくれました。それからみんなでおべんとをたべはじめました。それから山本さんや加藤さんだちがみかんのかはやばな／＼のかはやほおつてゐました。かへりには僕はひよろ／＼になつてしまひました。それからうちにかへつてつかれをぬかしてねました。

○えす（六月一日）

えすえすおいで

ごはんをあげよか

ばんをやるか

どつちでもこぼさないで

おたべなさいよ

○ぼくのお父さん（六月二日）

ぼくのお父さんはおこつたりわらつたりします。きよ年ぼくがいもうととけんかをしたら僕をほろきのさきであたまがわれるやうにいきほいよくぶちました。それでぼくはなきました。するとそのあくる朝はもうわらつてゐます。それで僕が二年生になつたら本や正ちゃんの冒険をかつてくれたりひ

らがなおとぎをかつてくれたりして、おもしろいおとうさんです。こんどは僕がおとうとやいもうとをいぢめると僕をおこりませんからぼくはふしぎでふしぎでたまりません。おとうさんはうしどしですから毎日やさしいがおこるときにはしんけになつておこります。それでお母さんがぼくだちをおこるとお父さんは「おおおつかないぞかみなりがなつてきたぞ」といつておどかしてゐます。ぼくはお父さんが大すきです。それでぼくが学校からかへるとお父さんがゐます。おとうさんはことし三十七です。

○僕のお母さん（六月二十九日）

僕のお母さんはおもしろいお母さんです。僕があそんでゐると「敏雄」とよぶのでいつてみますとおゆにいつておゆをくんでくれといふのです。それで僕は毎日いくときもあればときどきいつてくんであげます。さうすると、お母さんは僕に五錢ぐらい金庫に入れてくれます。僕はお母さんが大すきです。それでお父さんが神戸から、かへつてくると毎日ふざけてゐます。僕はそれを見るとわらつてしまひます。それでこんどあかちやんができて男がうまれたらうちにおいて女がうまれたらよそやつてしまふといつてゐます。僕はそれでよそにやつちやいやといつてなきますとお母さんは「それちややらないでうちにおかう」といつてゐます。僕はお母さんが大すきです。お母さんはことし二十九です。

○従弟のはがき